

「今も心に残る三つの言葉」から思う

中村 ゆかり

もう二十年以上も前、勤めていた中学校や特別支援学校での保護者のことばである。

一つは、重度の女生徒の母親が、生理の時「大変だから、手術をして止めることもできるが、将来可能なら子供を産んで、私がいなくなったらこの子の面倒をみてくれないかと微かな望みをかけて、このままいたい。」この時、私は何も答えることができなかったが、年を経る毎に親の気持ちを思う。

二つ目は、「先生は所詮、学校にいる時間だけ。僕らはずっと一緒にいるんだ。」ある父親の言葉である。この目標を掲げ学校と家庭が一緒になって取り組みたいと提案した時のこと。と、言っても結局は私からの押し付けでしかなく、家ではとてもじゃない、子供がとにかく機嫌よく元気に過ごしてくれたらそれでいいのだ。

三つ目は、バランス感覚が弱く、一人での歩行に不安のある児童を担当していた時のこと。私はとにかくこの子の歩行訓練を中心に日々取り組んだ。そして、階段の昇り降りへと進み、それも何とかクリアした。やっと、これで大丈夫と保護者と共に喜んだ。そこまでは良かった。が、そのあと、母親から、「先生、歩けるようになったら家から跳び出すように

なって、いろんな所、手の届かない所に鍵をつけなくてはならなくなった。」思ってもよらない言葉。しかし、それによって、教育、特に特別支援教育では、生活全体、その子の発達、よく言われる知・徳・体のバランスがいかに大切であるか、教えてもらったような気がする。

長い特別支援教育の中で、他にも数多くのことを学んだ。障害者への接し方。学校で学ぶ子供達でも、大人への見る目は鋭い。同情的に接したり、惑っていたりしては決して距離は縮まらない。どうしてほしいか、何が必要か。相手の目線に立って、迷った時には素直に自分の気持ちを伝える。そのことにより、距離は縮み、共に笑え合える。

数多くの失敗をし、悩んだ時もあったけど今、思えば、これは教師時代だけのことではない。今もそのまま当てはまることに気づく。

果たして、この社会は、障害者が住みやすい社会であろうか。前述した三人の保護者の言葉は自分達、親がみてやらねば：しかし、この子より先に死んでしまいう親としての不安の表れだと思う。

このような人達がおられることを心の片隅に置いて、私達にできることはなにかを問いかけていきたい。自分もいつ障害者の立場になるかもしれないのだ。一人ひとりが「何かできることありませんか？」と、声がかけられる優しい社会になればと願う。人と人のつながりを大切にしたい。私も、まず一歩、歩み出そう。